



上田市立東小学校
学校だより

望と勇

令和5年1月18日(水)
No.15
担当 久保田俊也(教頭)

令和5年がスタートして、半月が経ちました。東小では1月10日(火)に3学期が始まりました。今が1年で最も寒い時期ですが、47日間の3学期、一日一日を大切にしつつ、そして次年度のこと意識しながら、小学校生活を送っている児童の姿を見ることができます。

この冬は、インフルエンザの流行も心配されます。新型コロナウイルス感染拡大防止への取り組みも継続しながら、元気に小学校生活を送ることができるように、ご協力をよろしくお願いいたします。

3学期始業式(1月10日) 校長先生のお話

新しい年になって初めてですから、「明けましておめでとうございます」と挨拶をしましょう。明けましておめでとうございます。

皆さん、この休みは、お家の「お手伝い」や、お客さん、ご親せきへの「自分からあいさつ」ができたでしょうか。そして何より、けがや事故、病気にかかることなく、健康に過ごすことができたでしょうか。

誠に残念なことです。新型コロナウイルス感染者が、先週金曜(1月6日)の夜現在、長野県で3,989人と増えており、過去2番目の多さであると発表されています。死亡の発表は10人です。私たちは、

2023年も引き続き、「新型コロナ感染予防に努める」必要があります。これまで私たちが行ってきた、三密をさけること、きちんと手洗いと消毒をすること、マスクをきちんと着用すること、適度な換気と加湿を行うことについて、引き続き、行ってほしいと思います。

さて、いよいよ今日から3学期が始まります。3学期は、一年の中でもっとも短い学期で、今日を入れて47日間です。短いですが、学年のまとめ、締めくくりをすると同時に、次の学年・学校に向かって、準備をする、大切な学期です。

6年生は小学校を卒業する学期です。4月を迎えると、中学校に進みます。

5年生は6年生から児童会やクラブなど、引き継ぎをする学期です。

先ほど、3学期の決意を1年生と3年生、5年生の代表児童に発表してもらいました。素晴らしい発表をありがとうございました。

3学期は、皆さん一人一人が、新しい学校や学年に向けて、これまでの自分をふりかえりながら、特にこれだけは努力してなんとかしたいということを決めて、友だちといっしょに向上を図っていく、たしかな学期にしてほしいと願っています。

まだまだ寒い時期が続きます。寒さに負けず、コロナに負けず、健康な身体を保ちながら、充実した3学期を送ってほしいと思います。

終わります。

三学期 大切な47日間

学年をまとめ、次の学年の準備をする学期

これまでの自分をふりかえって

いちばん努力することをきめて

友だちといっしょに向上を図る

たしかな学期にしよう

2学期終業式（12月26日） 校長先生のお話（一部）

今日は2学期最後の日です。8月23日の始業式から、今日までの84日間、学習を積み重ねてきました。今、2年生と4年生の代表の皆さんが、2学期をふり返って、がんばったことをそれぞれ発表してくださいました。立派な発表をありがとうございました。

始業式に「2学期大切にしてほしいこと」として、次の3つのお話しをしました。

『開心眼』『ひきつづき新型コロナの予防に努めよう』『チクチク言葉を封印し、ふわふわ言葉を広げよう』

まず『開心眼（かいしんがん）』についてですが、東小学校開校時より校長室に掲げてあるこの言葉を、皆さんと考え合い、解き明かす学校にしたいとお話ししました。それぞれのクラスや個人で、これはどんな意味だろうと考えてくれたひともいると思います。私も考えました。「かいしんがん」心の眼をひらく。もしかしたら、「私たちはふだん、人や物のことを、見た目決めつけたり、判断してしまうことがあるので、そうではなくて、しっかりと心の眼で見ることができるようになろう」ということなのかなとも考えました。いろいろ調べてみましたところ、どうやら、この「心の眼をひらく」の意味は、このようなことであることがわかってきました。「心の眼をひらく修行をなさい」・・・日本では昔からいろいろな修行が行われてきました。また、修行の種類が多いことが、日本文化の特徴の一つと言えます。修行というのは、たとえば、学校で学ぶ知識や学問をおさめるという、いわゆる知性にかかわることではなくて、知性のもうひとつ向こう側になる、人間の性格や精神を鍛えようとするものです。例えば「生け花」「茶道」なども、すべて修行の意味をもち、その芸を磨くためのひたすらの努力は、仏教の修行に通じるものがあると考えられます。かつて、千利休が茶室の床柱に花生けの釘を打つことを大工さんに言いつけたそうです。大工さんは釘を持って柱にあてて「この辺に打ちましょうか」と聞くと、離れて座っていた利休が目で見当をつけ、「それは高（低）すぎる」「ちょっと高（低）い」と数十回も釘を上にし、下にし、やっとなこと、「うむ、そこならよろしかろう」と利休が言ったそうです。さて、いよいよ打つときになって、大工さんは「ひとつ、利休を試してみよう」と思い、先ほど定めた場所よりも少し下に釘を当てて、「ここでしてでしょうか」と聞いたそうです。すると利休は、「そこは少し低いようだ」と言ったので、大工さんは、今度は上にあげました。すると利休は、「そこは少し高い」と言ったので、三度目に先ほど定めた場所に釘をあてると、利休は「そうだ。そこだそこだ」と言ったそうです。その道に達した人々には尺度よりも正しい眼力、いうところの心眼ともいふべきものがある。こんな深い意味が、この開心眼にはあったようです。このことを皆さんの2学期の努力にあてはめてみますと、「毎日の清掃、磨きタイムを通して自分が磨くべき場所が分かるようになってきたこと」「フラワーアレンジメントや茶道クラブで活動したこと」「音楽会では、どの学年も楽器に目をやらなくても、一音一音、正確に発し、聴く人に思いを伝えることができるようになったこと」「6年生の皆さんは毎朝、グラウンドを走ったり、「ともしび」の里駅伝に出場したりしながら、今の自分の姿を俯瞰し、これからの自分のありようを問いかけていたこと。それぞれが、それぞれの修行（トレーニング）を通して、達人（達観した人）を目指し、努力を積み重ねていたと思います。「開心眼」・・・同じ東小で学ぶものとして、これからも大切にしていきたいと思います。（後略）

2学期終業式の校長講話も併せて紹介しました。本年も、3学期も、どうぞよろしくお願いいたします。（東小学校）